

君に触れると

仲村ゆうな

登場人物表

山口美晴 (12-21) 学生

遠藤大和 (12-21) 美晴の同級生

熊田武 (56-61) 大和のかかりつけ医

杉下里奈 (19) 大和の大学の同級生

中村祐人 (21-22) 美晴の大学の先輩

長谷川克則 (48) 美晴の大学の教授

遠藤温子 (42) 大和の母親

養護教諭

看護師

あらすじ

中学生の山口美晴はある日、クラスメイトの遠藤大和の秘密を知る。大和に触れると、驚くほど冷たい。大和には体温が無いのだ。まるで死体のように。

秘密がバレた大和は、これ以上自分に関わらないよう美晴に警告するが、美晴は聞かない。うざったく思う大和だったが、身を挺して秘密を守ってくれる美晴に対し、次第に心を開いていく。一方好奇心が止まらない美晴は大和のかけつけ医である熊田武に会いに行く。熊田から大和の話を知り、美晴は大和への恋心に気付かされる。

同じ高校に進学した二人。ある時大和の身体に火傷の跡を発見した美晴は、大和が母親から虐待を受けていることを知る。大和を助けるためにはどうしたらいいか。考え抜いた結果、大和に体温を与えるため、美晴は医者を目指すことに。

一年間の浪人生活の末、無事医学部に合格す

る。先に大学に進学していた大和と再会するが、美晴以外の人も積極的に交流を持つ大和に違和感を覚える。また、大和が想いを寄せる杉下里奈との出会いから、美晴は大和への独占欲を露わにする。大和は美晴と決別しようとするが、ある事件をきっかけに里奈と疎遠になり、美晴にすぎるようになる。

コロナが蔓延し体温が注目されるようになり、より大和にとって生きづらくなった世界。美晴は引きこもる大和を支えようとし、勉強もおろそかになってしまう。しかし、自分が医者を目指した意味を考え、どうすべきか苦悩する。そして初めて大和に触れた日を思い返し、美晴は大和への本当の思いに気付く。すがりつく大和を振り払い、美晴は大和から離れる。

数年後、医者になった美晴は誰かの体に触れ、温かさを感じるのだった。

○中学校・保健室

大和の声「離れてよ。一人で大丈夫だから」

美晴の声「いやいや保健委員なので」

ドアが開く。

山口美晴（12）、入ってくる。

美晴「失礼しまーす」

美晴、キョロキョロ見渡すが誰もいない。

美晴「あれ、先生いない」

だるそうな遠藤大和（12）、入ってくる。

美晴「とりあえず座って」

美晴、大和の肩に触れようとする。

が大和、美晴から身体をそらす。

大和「分かったって」

大和、ソファに腰掛ける。

美晴、引き出しを次々開ける。

大和「ねえ、もう戻ってていいから」

美晴「あった」

美晴、体温計を大和に差し出す。

美晴「はい。測ってみて」

大和、目をそらして、

大和「……いい」

美晴「いいって、何で？」

大和「いいから」

美晴「だって熱あるかもよ？ ほら」

美晴、大和のおでこに右手を当てる。

× × ×

(フラッシュユ)

棺桶を覗いている喪服姿の美晴(6)。

祭壇には祖母の遺影が飾ってある。

美晴、棺桶の中に右手を伸ばす。

× × ×

大和「触るな！」

ビクツとする美晴。

大和、美晴を睨みつける。

美晴「あ……」

大和、走ってドアに向かう。

養護教諭、ドアを開ける。

養護教諭「あら？」

大和、養護教諭の横を走って出て行く。

養護教諭「わっ」

バタバタと足音が遠のく。

養護教諭「何？　どうしたの？」

呆然としている美晴。

手には体温計を握りしめている。

○タイトル

『君に触れると』

○中学校・教室（夕）

教師「はい、じゃあプリント配るぞー」

教師、列ごとにプリントを配っていく。

生徒「一枚足りませーん」

美晴、右手をじっと見つめている。

生徒「先生ー、早退した人のって机の中に入れ

ておけばいいですかー」

美晴、ハッと気づく。

教師「あー、遠藤のか。うん、入れておいて」

美晴、勢いよく手を挙げて、

美晴「先生！」

○アパート・玄関（夕）

美晴、チャイムを押す。

部屋から足音が聞こえる。

大和の声「はい？」

美晴「あ、山口です！」

大和の声「……山口さん？」

美晴「遠藤くん？ そう！ 山口です！」

大和の声「……何」

美晴「プリント！ プリント届けに来ました！」

大和の声「ポストに入れといて」

美晴「渡す！ 直接渡すから！」

美晴、ドアをノックする。

鍵が開く音。

大和、ドアから顔を覗かせる。

大和「近所迷惑」

美晴「具合、どう？」

大和「大丈夫です。ありがとうございます」

大和、美晴からプリントを受け取ろうとする。
する。

が、手を離さない美晴。

大和「ちよ」

美晴「どうして君は冷たいの？」

大和「……別に、これが普通だけど。人付き合

い苦手なんだ。不快な思いさせたならごめん」

美晴「ううん、私が言いたいのはそのじゃなく

て。いや、そうもあるんだけど、えっと」

美晴、大和を見つめる。

美晴「どうして君には体温がないの？」

大和「……」

美晴「触った時、すごく冷たかった。平熱が低

いとかそういうレベルじゃなくて。すごく、

冷たかった。まるで……」

大和「死んでるみたい？」

美晴「え……」

大和、美晴を見つめる。

美晴「えっ、いや、えっと、アイスみたいだな

って！ えへ、えへへ……。アイス……」

大和「……誰にも言わないで」

美晴「え」

大和「まあ、どっちでもいいけど」

大和、美晴の手からプリントを奪う。

勢いよくドアを閉める。

美晴「あ……」

美晴、玄関のドアをじっと見つめる。

○中学校・教室

わいわいと騒がしい生徒たち。

大和、机に突っ伏している。

美晴、大和に近寄る。

美晴「遠藤くん」

ビクツとする大和。

美晴の顔を見て席を立つ。

慌てて後を追う美晴。

美晴「ねえ待って」

○同・廊下

早足で歩く大和。

美晴、大和を追いかける。

美晴「ね、具合大丈夫？」

大和「……」

美晴「風邪だった？」

大和「……」

美晴「熱中症かな。最近暑くなったもんね」

大和「……」

美晴「あ、そういえばもうすぐプール始まる

ね！ 楽しみだねえ」

大和、立ち止まる。

ビクツとして立ち止まる美晴。

大和「……あのさあ」

美晴「うん？」

大和「何なの？」

美晴「プールだねえって」

大和「じゃなくて、さつきから。話しかけてき

て」

美晴「話したいから、話しかけたんだよ」

大和「何それ」

美晴「私遠藤くんのこともっと知りたい」

大和「……言ったよね。関わらないでって」

美晴「(考え込んで)……言ってるないよ？」

大和「まだ言ってなかった？ じゃあ今言う。」

関わらないで」

美晴「え、何で？」

大和「なんでも」

大和、歩き出す。

美晴、慌てて追いかける。

美晴「ね、プール……」

大和「入らないよ」

美晴「泳ぐの苦手？」

美晴、大和の肩に触れようとする。

大和「触るな！」

ビクツとする美晴。

大和、美晴を睨みつける。

大和「触るな近寄るな関わるな」

大和、歩いて行く。

美晴、大和の背中を見つめる。

○同・教室

教師「生物は二種類に分かれます。えー、恒温

動物と変温動物。我々人間は」

美晴、隣の席の女子生徒に向かって、

美晴「ねえねえ」

女子生徒、ノートを書いている。

美晴「ねえねえ」

女子生徒、気づいて、

女子生徒「(不審そうに) うん？」

美晴「遠藤くんってどんな人？」

女子生徒「へ？」

美晴「小学校同じだよね？」

女子生徒「そうだけど……」

女子生徒、教師の方をチラチラ見る。

女子生徒「(小声で) あ、後でもいい？」

美晴、女子生徒をまっすぐ見つめて、

美晴「どんな人だった？」

女子生徒、眉をひそめる。

教師をチラチラ見ながら、こっそり美晴

の方に机を近づける。

女子生徒「(小声で) 同じだったって言っても、

最後の一年だけね。遠藤くん、六年の時に転

校してきたから」

美晴「そうなの？」

女子生徒「（小声で）結構転校繰り返してきたみたい。転勤族？　なのかな」

美晴「ふうん」

女子生徒「（小声で）遠藤くん、休むこと多かったし、話したことないし、あんま知らないかな」

美晴「そっか」

教師「はいじゃあここまで消すよー」

女子生徒、慌てて黒板を写す。

美晴「あ、ねえ、遠藤くんと仲良い人とかは？」

女子生徒、美晴を無視してノートを書いている。

美晴、大和の方を見る。

窓の外を見つめている大和。

○同・プール

キヤツキヤツ泳いでいる生徒たち。

スクール水着の美晴、プールの縁でしゃがみ込んでいる。

縁の水溜りに蟻が溺れている。

蟻を指で掬ってまじまじと見つめる美

晴。

ふとプールサイドを見ると、日陰で体育

座りしているジャージ姿の大和が目

に入る。

美晴、じーっと大和を見つめる。

女子生徒「の声」「男子絶対見てたってー」

女子生徒「あいつミホのこと好きなんだって

ー」

女子生徒「嘘ー」

女子生徒「…、歩いてくる。

女子生徒「、しゃがんでいる美晴に気づ

かずぶつかる。

コロんと転がる美晴。

女子生徒「あ！ ごめん！ いたんだ！」

起き上がった美晴、ペコっとお辞儀する。

女子生徒「ごめんなさいー」

女子生徒「ちよつと何やってんのー？」

女子生徒「だってさー」

女子生徒「…、歩いて行く。

女子生徒「「てか体冷えるよねー」

女子生徒「ちよつと日光に当たったところ」

女子生徒「あはは、体温上がるよ」

ハッと気付く美晴。

○同・教室（夕）

誰もいない教室。

大和、机の中から教科書を取り出す。

机の中からメモが落ちる。

拾ってみると『理科準備室に来てくださ

い。山口美晴』と書かれている。

大きくため息をつく大和。

メモを握りつぶす。

ふと窓の外を見る。

セミの鳴き声が響いている。

○同・理科準備室（夕）

床に体育座りしている美晴。

美晴「ふう……」

美晴、額の汗を拭う。

ガラッとドアが開く。

ビクツとする美晴。

大和、入ってくる。

大和「何してんの」

美晴「あ、やっと来た！」

大和「用がないんなら帰るけど」

美晴「実験だよ！」

大和「実験？」

美晴、手招きする。

大和、ため息をつき、美晴の隣に座る。

美晴「この前の理科の授業で変温動物って出て

きたじゃない？」

大和「(面倒くさそうに) うん」

美晴「遠藤くんって変温動物なんじゃないか

な？」

大和「は？」

美晴「外の空気が冷たいから、遠藤くんも冷た

くなるんだよ」

大和「……いや違うと思うけど」

美晴「暑いところにいれば遠藤くんの体温も上

がると思うの！」

大和「それでここに呼び出したの？」

美晴「うん！　ここすっごく暑いでしょ？」

美晴の額を汗が伝う。

美晴「一番日当たりがいいし、クーラーもない

し、風通りも悪いし。ここが最高！」

大和「（ため息をつき）あのねえ」

肩で息をしている美晴。

美晴「うん？」

大和「哺乳類、俺たち人間は恒温動物。哺乳類
に変温動物はいない」

美晴「そうだっけ」

大和「そうだよ。話ちゃんと聞いてた？」

美晴「（息切れしながら）聞いた、つもりだった
けど」

大和「哺乳類は環境によって体温が変化したり
しないの。……熱湯かけたって体温は上から
ない」

美晴「そうかな」

大和「そうなの。決まってんの」

美晴「遠藤くん頭いいね……」

大和「授業聞いてれば誰でも分かる」

美晴「でもさ、今、私、暑い……」

美晴、倒れる。

大和「えっ！ ちょ！」

虚な目をしている美晴。

大和「おい！」

ぼんやりと大和の姿が霞む。

○一軒家・縁側

誰かの膝に眠っている美晴、ぼんやりと

目を開ける。

美晴「おばあ、ちゃん……？」

風鈴の音が聞こえる。

○中学校・保健室（夕）

ハッと目を覚ます美晴。

ベッドに横たわっている。

養護教諭、気付いて、

養護教諭「あ、気がついた？」

美晴「えっと、あ、はい」

美晴、もそそと起き上がる。

キヨロキヨロあたりを見渡すが養護教

諭しかいない。

養護教諭「熱中症ねー、水分取って」

養護教諭、ペットボトルの水を差し出す。

美晴「はい」

美晴、水を飲む。

養護教諭「お母さん迎えに来るって」

美晴「はい。あの、えっと？」

養護教諭「遠藤くんが運んで来てくれたのよ」

美晴「え？」

養護教諭「やっぱり男の子って力あるわねー。

後でお礼言っておきなさいね」

美晴「……遠藤くんが」

養護教諭「ほらほら、お母さん来るまで横にな

っておきなさい」

養護教諭、美晴を寝かせる。

○同・廊下

大和、歩いている。

美晴の声「遠藤くん！」

大和、振り返ると、美晴、駆け寄ってくる。
る。

美晴「おはよ」

大和「……うん」

美晴「昨日、助けてくれてありがとう」

大和「助けたってわけじゃ」

美晴「でも私は助かったよ？　ありがとう」

大和「具合、大丈夫なの」

美晴「うん！　もう元気！」

大和「あっそ」

大和、歩き出す。

美晴、慌てて追いかける。

美晴「あっ、ねえ、遠藤くんが運んでくれたん

だってね。重くなかった？」

大和「重かった」

美晴「え、ごめん！」

大和「いや……こっちこそ」

大和、美晴から目を逸らし、

大和「触って、ごめん」

美晴「え？」

大和「ごめん」

美晴「いや、でも触らないと運べないし？」

大和「冷たかったろ……」

大和、自分の手を見つめる。

美晴「あ……」

大和「ごめん」

美晴「そんな……。全然謝ることじゃないよ！」

大和「でも」

美晴「気持ち良かったもん」

大和「え」

美晴「ありがとう」

美晴、微笑む。

美晴「遠藤くんの手は魔法の手だね！」

大和、うつむく。

大和「……呪いだろ」

美晴「(よく聞こえず) え？」

大和「もう、変なことするなよ」

大和、教室に入る。

美晴「はい」

美晴、大和の後ろ姿を見つめて微笑む。

○同・教室

席について本を読んでいる大和。

女子生徒、歩いてくる。

机につまづき、体勢を崩す。

女子生徒「うわっ」

女子生徒、大和に掴まりそうになる。

が、二人の間に割って入る美晴。

女子生徒の手が美晴の顔面を突く。

女子生徒「きゃ！」

ギョツとする大和。

女子生徒「ご、ごめん！ 大丈夫？」

少し顔が赤くなっている美晴。

美晴「大丈夫、大丈夫」

女子生徒「本当にごめんね？ 保健室行く？」

不審そうに美晴を見る大和。

ニコツと笑う美晴。

× × ×

黒板を消している大和。

通りかかった教師、大和を見て、

教師「肩、汚れてるぞ」

教師、大和の肩に手を伸ばす。

が、ニユツと出てきた美晴の手。

ビクツとする教師。

美晴、大和の肩を乱暴に払う。

大和「痛い痛い」

教師「お、お前ら仲良かったんだな」

美晴「はい！」

大和「いいえ」

教師、苦笑いをして立ち去る。

大和、美晴を睨む。

ニコツと笑う美晴。

× × ×

座っている男子生徒「」。

男子生徒「・・・、背後からそっと近づく。

男子生徒「わぁ！」

男子生徒「、男子生徒」の背中を思い切

り叩く。

男子生徒「うおお！」

男子生徒「びっくりした？　びっくりした？」

男子生徒「びびりすぎだろー」

男子生徒「びびってねえよ！」

ワイワイ騒いでいる男子生徒たち。

女子生徒の声「またやってるよ」

女子生徒の声「男子ってバカだねー」

席で読書している大和。

美晴、ポーツと大和の横顔を見つめてい
る。

ふと、大和に近づく男子生徒……に気
づく。

慌てて大和のもとに向かう美晴。

男子生徒、そっと手をあげる。

男子生徒「わっ！！」

男子生徒、思いっきり手を前に出す。

が、大和との間に割って入る美晴。

大和、振り返りギョツとする。

男子生徒の手が美晴の胸に当たってい
る。

しんと静まり返る教室。

女子生徒「さいっつてい！！」

男子生徒〽、慌てて美晴の胸から手を避ける。

男子生徒〽「は、はぁ？！」

女子生徒「ホント男子最低！」

女子生徒数名、美晴に駆け寄る。

女子生徒「大丈夫？ 山口さん」

美晴、キョトンとしている。

女子生徒「きもい！」

男子生徒〽「事故だから！ 事故！」

女子生徒「謝りなよ！」

ギャーギャー騒いでいる男子と女子。

大和、美晴を見つめる。

美晴、大和と目が合い微笑む。

○同・理科準備室（夕）

美晴・大和、入ってくる。

大和、ドアを閉める。

美晴を睨みつける。

美晴「え、何？」

大和「何なの、さっきの」

美晴「えっと、何か触られそうだったから。ほ

ら、触ったら遠藤くんが冷たいって分かっち

やうかなって」

大和「(眉間にシワを寄せて) だからって」

美晴「知られたく、なかったんだもん」

大和「え？」

美晴「あ、いや、知られたくないかなーって、

遠藤くんが！」

大和「そりゃそうだけどさ」

美晴「触られなくて良かった」

大和「良くないよ！」

ビクツとする美晴。

大和「……一応、女子だろ。気をつけてよ」

美晴「え？ あー、平気だよ。胸も何もないし。

あはは」

大和「それでも！ なんか、俺のせいというか

……。普通、嫌なもんだろ。女子ならさ」

美晴「う、うーん」

大和「そうだろ！」

美晴「そう、だね」

大和「トラウマとかになったら困るし」

美晴「うーん……？」

大和「まったくさあ」

美晴「じゃあ遠藤くん触って」

大和「はあ?!」

美晴「上書きして」

大和「何言って」

美晴、自分の胸を叩く。

美晴「さあ！」

大和「バカじゃねえの？ 何言ってんだよ」

美晴「遠藤くん得上書きしてほしいの」

大和「ふざけんな」

美晴「じゃないと私トラウマになるかも」

大和「はあ？」

美晴、大和を見つめる。

大和、大きくため息をつく。

大和「……勝手にしろよ」

大和、手を差し伸べる。

美晴を見ないように横を向く。

美晴、大和の手を握る。

美晴「冷たいね」

大和「知ってるよ」

美晴、大和の手を自分の胸に押し当てる。

大和、ギョツと目をつぶる。

大和「も、もういいでしょ？」

美晴「心臓、動いてるのわかる？」

大和、チラッと美晴を見る。

大和「分かるよ」

美晴、大和の胸に手を当てる。

大和「ちよっ」

美晴「遠藤くんのもドキドキしてる」

美晴、微笑んで、

美晴「生きてるって感じるね」

ハッとする大和、美晴を見つめる。

ニコツと笑う美晴。

お互いの胸に手を当てている美晴と大

和。

○通学路（夕）

信号待ちしている大和と美晴。

美晴「でね、クイズの答え見る前にお母さんに

お風呂入りなさいって言われちゃって」

信号が青になる。

大和「じゃあ。ここで」

美晴、振り返り、

美晴「え？」

大和「俺今日こっちだから」

美晴「寄り道？」

大和「病院」

美晴「病院？ どっか悪いの」

大和「（鼻で笑って）悪いっていうか、一応さ。

定期健診」

大和、自分の手のひらを見つめて、

大和「こんな体なわけだし」

大和、ニコツと笑って、

大和「また明日」

信号が点滅する。

大和、信号機を見て、

大和「ほら早く渡らないと」

美晴「……ね、どうして遠藤くんは冷たいの」

信号が赤になる。

美晴「何かそれってさ、調べられないの？ ほ

ら、研究とか？ エコーとかMRI？ 薬とか

もしあったら」

大和「もういいんだよ」

美晴「もういいって？」

大和「……いろいろやったよ。でも何も分から

ないんだ」

美晴「でも、もしかしたら何か分かるかも」

大和「……もうたくさんなんだよ」

× × ×

信号を渡る美晴。

ふと振り返ると、歩いて行く大和の後ろ

姿が見える。

じっと見つめる美晴。

○病院・外観（夕）

看板には『熊田産婦人科・小児科医院』

とクマのイラストが書かれている。

○同・診察室（夕）

熊田武（56）、カルテに書き込んで、

大和「クマ先生、今日俺何度だった？」

熊田「え？」

大和「いや、いや」

大和、ジャケットのボタンを閉める。

熊田「……楽しいかい？ 中学校」

大和「まあまあ」

熊田「結構結構。友達はできた？」

大和「……変な人が」

熊田「うん？」

大和「別に。じゃ、ありがとうございますー」

そそくさと出て行く大和。

熊田「またね」

カルテを見る熊田。

看護師の声「先生ー？」

熊田「うん？」

看護師「なんか……」

看護師に連れられてる美晴。

看護師「外でこそそしてて……」

美晴、熊田を見つめて、

美晴「遠藤くんのこと、教えてください」

× × ×

向かい合って座っている熊田と美晴。

熊田「お名前は？」

美晴「山口美晴です」

熊田「美晴ちゃん。どうして大和くんのこと

知りたいのかな」

美晴「どうしてかなーって」

熊田「うん？」

美晴「どうして大和くんは冷たいのかなーって」

熊田「知ってるんだね」

美晴「はい」

熊田「うん。そうかそうか」

熊田、美晴に体温計を差し出す。

熊田「測ってみて」

美晴、体温計を受け取り脇に刺す。

ピピッと体温計が鳴る。

美晴、体温計をチラッと見て、

美晴「三十六度八部です」

美晴、体温計を差し出す。

熊田「お、平熱高いんだね」

熊田、体温計を受け取り、ガーゼで拭く。

熊田「理科は好き？」

美晴、首を横に振る。

熊田「(笑って) そうか、そうか」

熊田、咳払いをして、

熊田「人には体温というものがあって、温かい

よね？ それは体の中が燃えているからな

んだ」

美晴「燃え……？」

熊田「生きるために体の中を燃やしてエネルギー

ーを作るんだよ」

美晴「へー」

熊田「温かいから生きている、生きているか温

かい」

美晴「……体温がない人は？」

熊田、眉を下げて微笑む。

熊田「怖い？」

美晴「怖い？ 遠藤くんがですか？」

熊田「うん」

美晴「全然。なんで怖いんですか？」

熊田「(拍子抜けして)君は変わっているね」

美晴「よく言われます」

熊田「(ぼそっと)そうか、大和くんはそういう人に出会ったのか」

美晴「でも私にだって怖いものはありますよ？」

熊田「例えば？」

美晴「おばけとか、幽霊とか」

熊田「幽霊も体温がないけど？」

美晴「そっか……。でも遠藤くんは怖くない」

美晴、首を傾げる。

美晴「遠藤くんだから怖くない？」

熊田「どうしてだろうね」

美晴、少し考え込んでハッとす。

美晴「……遠藤くんのが好きだからです」

熊田「……そうか」

微笑む熊田。

○高校・教室

美晴（二二）、入ってくる。

美晴「大和くん！」

席にいた大和（二二）、気付く。

美晴、手提げ袋を見せて、

美晴「お昼食べよー」

大和、立ち上がり美晴の元に向かう。

二人の様子を遠巻きに見ている男子生

徒 1・2。

男子生徒「なんで俺には彼女いないんだろう
な」

男子生徒「遠藤にさえているのにな」

男子生徒「中学かららしいよ」

男子生徒「いいなあ」

男子生徒「羨ましいなあ。二人きりの世界っ
て感じで」

○同・中庭

弁当を食べている美晴。

美晴「大和くん！ 修学旅行だよ！」

大和「……ああ」

大和、パンをかじる。

美晴「楽しみだねえ。京都だよ！ 京都。あと

ねえ、奈良で鹿におせんべいあげるんだ」

大和「うん」

美晴「ね、大和くんは何したい？」

大和「うん？」

美晴「自由行動。自由行動の時はクラス別でも

一緒にいれるし」

大和「……俺、行かない」

美晴「え！ 何で！」

大和「行かない」

美晴「どうして？ 修学旅行だよ？ 大和くん、

中学のも行っていないでしょ」

大和「そうだね」

美晴「一生に一度だよ？ 最後の修学旅行だ

よ？」

大和「行かないよ」

美晴「何で？」

大和「修学旅行はバレルリスクが高すぎる。基本集団行動だし、風呂とか部屋とか、いつもより距離近くなるでしょ」

美晴「そ、そうだけど……」

大和「高校編入するってなかなか面倒だし」

美晴「あ、じゃあ先生に相談してさ、個室にしてみたら？ ほら、一人じゃないと寝れないとか言って」

大和「(笑って)無理でしょ」

美晴「でも、せつかくの……」

大和「京都はどこにも逃げないよ。いつでも行こうと思えば行けるし」

美晴「修学旅行は逃げるよ……」

美晴、うつむく。

大和「……俺、八つ橋ね」

美晴「……」

大和、微笑む。

○病院・診察室（夕）

熊田（59）、カルテを書いている。

美晴、ドアから顔を覗かせる。

美晴「大和くん帰りました？」

熊田「帰ったよ」

美晴、入ってくる。

熊田「君もよくこそこそやるね」

美晴「(口を尖らせて)大和くん、私には病院に

着いて来るなって」

熊田「そうか」

美晴「そういうところ頑固だからなー。こっそり私が跡つけてるなんて知ったら怒るに決

まっています」

熊田「あはは」

美晴「大和くんに言ったりしてないですよね？」

熊田「言っていないよ」

美晴「よかった」

熊田「で、今日はどうしたの」

美晴「大和くん修学旅行行かないって言うんで

す！」

熊田「ああ、聞いたよ」

美晴「健康的には問題ないですよね？」

熊田「ないね」

美晴「じゃあ何で……」

熊田「修学旅行は接触が多い」

美晴「クマ先生もそういうこと言うんだ」

熊田「今までみたいに美晴ちゃんが守るって言

っても限界があるでしょ？」

美晴「ううー……」

熊田「修学旅行には保護者の同意も必要だし」

美晴「大和くんが行きたいって言えば行かせて

くれるでしょう？」

熊田、美晴を見て微笑む。

熊田「修学旅行、楽しんでおいで」

○アパート・玄関（夕）

大和、入ってくる。

玄関に散らばっているペットボトル。

ラベルには『いのちのいずみ』と書かれて
いる。

リビングからヤカンが沸騰する音が
聞こえる。

リビングの方を見つめる大和。

○神社・境内

集合写真を撮っている一同。

カメラマン「はい、チーズ！」

美晴、むすつとしている。

カメラマン「はいオッケーです！」

教師「はい、じゃあ時間守るようにー」

生徒たち、次々とばらけていく。

突っ立ったままの美晴。

美晴「……つまんない」

○アパート・大和の部屋

ベッドに寝転がっている大和。

ヤカンが沸騰する音が聞こえる。

大和、布団の中に包まる。

○ホテル・宴会場（夕）

ワイワイ食事を楽しんでいる生徒たち。

美晴、窓の外を見つめる。

席を立つ。

○アパート・大和の部屋（深夜）

ベッドに寝転がっている大和。

ぼーっと天井を見つめている。

スマホが鳴る。

大和、スマホ画面を見ると、

美晴からの着信。

大和、電話に出て。

大和「はい？」

美晴（電話）「窓開けて！ 窓！」

大和「え、何？」

美晴（電話）「いいから！」

大和「何なの」

大和、窓を開ける。

暗い中、人影が見える。

大和、目を細める。

人影の正体はジャージ姿の美晴。

ニコニコしてこちらを見上げている。

大和「は?!」

○同・アパート前（深夜）

大和、走ってくる。

ニコニコしている美晴。

美晴「こんばんは」

大和「何してんの?!」

美晴「えっと」

美晴、大和を上目遣いで見て、

美晴「来ちゃった」

大和「来ちゃったじゃないよ……」

美晴「（照れて）えへへ」

大和「今頃大騒ぎになってるんじゃないの？」

○旅館・大部屋（深夜）

ガラッとふすまが開く。

女子生徒「ねえ、大変！」

女子生徒「な、何？」

女子生徒「カナコ、ケンタに告ったって！」

女子生徒「嘘ー！」

キヤツキヤ騒ぐ女子生徒たち。

畳まれたままの布団が部屋の隅にぽつ
んとある。

○アパート・アパート前（深夜）

美晴「大丈夫だよー」

大和「バカ……」

美晴「考えるよりも前に足が動いちやったんだ
もん」

大和、大きくため息をつき、

大和「駅まで送って行くから」

大和、歩き出す。

大和「ほら、戻りなさい」

美晴「戻るよ？ 戻るけどさ、その前に」

美晴、ニコッと笑って、

美晴「自由行動」

○道路（深夜）

並んで歩く美晴と大和。

美晴「夜の町って何だか違う風に見えるね」

美晴、ニコッと笑って、

美晴 「知らない土地に来たみたい」

大和 「いつもの場所だよ」

美晴 「もうっ」

大和 「だってそうでしょ」

美晴 「想像してみて？ 私と大和くんは新幹線に乗ってここまで来ました。知ってる人もいない、知ってる場所もないところ」

大和、辺りを見渡す。

辺りは暗い。

しんと静まり返っている。

街灯が消えかかりそうになっている。

美晴 「大和くんと二人で来られてよかったよ。

楽しいなあ」

大和 「……いつか、本当に行ってくれる？」

美晴 「うん？」

大和 「ここじゃないところ。ここから、連れ出してくれる？」

美晴 「どこに行きたいの？」

大和、スマホをチラッと見る。

大和 「ていうか」

美晴「うん？」

大和「時間大丈夫なの」

大和、早歩きになる。

美晴「あ、待って」

美晴、大和の左肩に触れる。

大和「痛っ！」

ビクツとする美晴。

美晴「えっごめん！」

大和、慌てて肩を庇う。

美晴「痛かった？」

大和「いや、大丈夫……」

美晴「怪我した？」

大和「してないよ」

美晴「ちよつと見せてみて」

美晴、大和の襟ぐりを掴む。

肩には火傷の跡。

美晴「え」

大和、慌てて左肩をしまう。

美晴「どうしたの？ これ」

大和「何でもない」

美晴 「火傷？ 大丈夫？」

大和、美晴にニッコリ笑って、

大和 「大丈夫だよ」

美晴 「本当に？」

大和 「本当に」

美晴 「病院行く？」

大和 「大袈裟だって」

美晴 「氷買ってくる！」

大和 「いらないよ」

美晴 「でも」

大和 「大丈夫だって」

美晴 「痛い？」

大和 「……」

美晴 「痛いでしょう？」

美晴、大和の顔を覗き込む。

肩が震える大和。

美晴 「大和くん？」

大和の目から涙が溢れる。

大和 「(か細い声で) 痛い……」

美晴 「痛い？ 大丈夫？」

大和「痛いよ……」

美晴「大和くん……」

大和、膝から崩れ落ちそうになる。

美晴、思わず大和を抱きしめる。

大和「痛い……」

美晴、大和の背中をさする。

ポロポロ涙が溢れる大和。

美晴「私、大和くんを守りたいよ……」

美晴、涙を流す。

○病院・診察室

看護師「先生ー。美晴ちゃんからお土産もらい

ましたよー」

熊田「おお、おかえり」

熊田をじっと見つめる美晴。

看護師「あとでみんなでいただくね」

看護師、出て行く。

熊田「楽しかった？ 何見たの？」

美晴「クマ先生、大和くんの火傷のこと知って

ますよね？」

熊田「……」

美晴「あれは何なんですか？」

黙ったままの熊田。

美晴「どうして大和くんはあんなに苦しまなき

やいけないんですか？」

熊田「……十七年前、僕がまだ大学病院に勤め

ていた時、大和くんを取り上げたんだ。……

冷たかった。でも、大きな声で泣いた。僕は

その子を、そのまま……お母さんに抱かせて

しまった。大和くんを初めて抱いた時のお母

さんの顔は忘れられない」

美晴「……あの火傷ってお母さんが？」

熊田「美晴ちゃん、あのね」

美晴「なんでそんな酷いことできるの！」

熊田「お母さんも必死なんだよ」

美晴「大和くんあんなに痛がってるのに！」

熊田「(声を荒げて)必死なんだよ！ 誰にも救

いを求められなくて」

ビクツとする美晴。

熊田「……大和くんのお父さんはね、大和くん

を抱っこした次の日から病院に来なくなっ
てしまっただね。お母さんはずっと一人で育て
てきたんだ。誰にも大和くんを抱かせること
ができずに」

美晴「……大和くんが冷たいから？」

熊田、頷く。

美晴「じゃあ先生助けてよ。あの火傷だって……
……なんで助けてくれないの？」

熊田「……無力だね」

美晴、目に涙を溜めて熊田を見つめる。

美晴「……分かりました」

○高校・校庭

手に卒業証書を持った生徒たち、写真を
撮ったりして騒いでいる。

一人校門に向かう大和。

○病院・診察室

熊田「大和くんももう大学生かあ、早いねえ。

春からは一人暮らし？」

大和「今でも母さんごねてますよ」

熊田「大和くんが心配なんだよ」

大和「だから俺いつも言ってるんだ。母さん

がいなくなったら俺は一人で生きてかなき

やいけないんだから、大学行って、少しでも

いいところ就職したほうがいいでしょって。

(ニヤツと笑って) そしたら黙る」

熊田「……人は一人では生きていけないよ」

大和「そう、かな」

熊田「うん」

大和「……中学からずっと一緒の子がいてさ、

変な人なんだけどなんかずっと一緒にいて。

高校も、母さんには通信制にしろって言われ

ただけど、その子と同じところ行きたくて。

俺、その子がいたから、なんか、ずっと生き

てたんだよね。だから大学も……」

うんうんと聞く熊田。

大和「でも、一緒に行けないって言われた」

○マンション・美晴の部屋

カーテンを閉め切った部屋。

机の上に山積みになった参考書。

大和(三)「浪人して、医学部受験するって」

○病院・診察室

大和「医者になりたいなんて知らなかった」

熊田「そうか」

大和「なんか、いろいろ考えてるんだなーって。

俺なんも考えてないから」

熊田、首を横に振る。

大和「俺も、変わらなきゃ……。一人でも生き

ていけるように。……。いや、誰かと生きてい

けるように」

○マンション・美晴の部屋

スマホにラインの通知が来る。

画面が真っ暗になり充電ゼロパーセン

トの表示が出る。

じっと問題集を睨む美晴。

○病院・診察室

向かい合って座っている美晴（16）と熊田（61）。

熊田「そうか、おめでどう」

美晴「なんとか、合格できました」

熊田「頑張ったね」

美晴「さすがに、親の反対押し切って浪人させてもらったので、一年で決めなきやなって」

熊田「ははは、そうだね」

美晴「それに、大和さんの近くに早く行きたいし」

熊田「……そうか。大学も近くなんだっけ？」

美晴「はい」

熊田「……うん」

○同・玄関前

美晴・熊田、出てくる。

熊田「身体に気をつけて」

美晴「私、頑張ってお医者さんになります。それで、大和さんに体温をあげます。もう大和

くんが苦しまないように」

熊田、微笑む。

美晴「さようなら、クマ先生」

×××

歩いて行く美晴の後ろ姿。

熊田、美晴の後ろ姿を見つめている。

熊田「ごめんね、美晴ちゃん。君に、大和くんを救ってほしいと思ってしまったんだ」

○大学・正門

大和（16）、立っている。

美晴、大和を見て、

美晴「大和くん！」

大和、気付いて、

大和「美晴！」

美晴、大和に駆け寄る。

大和「迷わなかった？」

美晴「迷った」

大和「迷ったか。まあ、これから道覚えるよ」

美晴「うん！」

○大学・構内

大和「普通自分の通う大学見に行くんじゃないの？」

美晴「いいの！ 大和くんが通ってる学校見たかったんだ。人全然いないねえ」

大和「まあ春休みだし。授業始まれば人で溢れかえってるよ」

美晴「うわぁ……」

大和「ま、いろんな奴がいて楽しいよ」

美晴「楽しい……？」

大和「あ、お腹空いてるよね？ 学食行く？」

美晴「う、うん」

○同・食堂

向かい合って食事している美晴と大和。

美晴「あー、なんかこの感じ久しぶりだなあ」

大和「会ったの一年ぶりだもんね」

美晴「全然連絡できなくてごめんね」

大和「勉強頑張ってたんでしょ？ 偉いよ」

美晴「(照れて) うん」

大和「改めて、合格おめでとう」

美晴「ありがとう。これからは、ずっとそばに
いられるね。でね、お買い物とか大和くん」

大和、何かに気付いて、手を振る。

美晴「うん？」

大和「里奈！」

美晴、振り返る。

杉下里奈(16)、手を振って駆け寄ってくる。

里奈「お疲れー」

大和「お疲れ。いるとは思わなかった」

里奈「図書館に用あったから」

美晴、大和と里奈を交互に見る。

大和、気付いて、

大和「(美晴を指して)あ、中学からの同級生」

里奈「へえ、そうなんだ！」

里奈、美晴にニッコリ笑って、

里奈「こんにちは。杉下里奈です」

美晴「こ、こんにちは」

大和「同じサークルなんだ」

美晴「へ、へえ」

大和「違う大学に通うんだけど、大学生がどん

なものか見たいっていうから案内してて」

里奈「へえ！　どこの大学なんですか？」

美晴「えっと」

大和「医大。隣の」

里奈「え、すごい！　頭いい！」

美晴、里奈から目を逸らす。

大和「あ、里奈さ、今度美晴の買い物付き合っ

てあげてくれない？」

美晴「えっ」

大和「家具とかまだ全然揃えてないんでしょ？」

美晴「そうだけど……」

大和「俺女子の買い物とか分かんないもん」

里奈「いいよー。楽しそう」

美晴「え、ちょっと……」

○同・中庭

歩いている美晴と大和。

美晴、スマホを見る。

画面には里奈のラインのアカウント。

美晴「私、人見知りする」

大和「そんなこと言わないの。美晴もさ、もつと友達作った方がいいよ。大学って一番人脈広げられる時期だしさ」

美晴「……なんか、変わったね。大和くん」

大和「(笑って)そう？ まあでも大学入って少し考え方は変わったかも。今まで、バレないようにつて人と関わらないようにしてたけど意外と平気っていうか」

美晴「バレても、いいの？」

大和「いやそれはまだ……怖い。まだ神経すり減らす時はある」

美晴「だったら――」

大和「でも、怖がってるばかりじゃダメだつて気付いたんだ」

美晴「そうだったんだ……」

大和「サークルとか、バイトとかで人と仲良くなつて、そしたら今まで何であんなに怖がっ

てたんだろーってバカらしくなったよ」

美晴「ふうん……」

大和「美晴もさ、大学でそういう仲間を見つけられたらいいね」

美晴「(ぼそっと) 別にいらないけど」

大和「まずは里奈とさ」

美晴「うーん……」

大和「大丈夫だって。里奈、すごくいい子だから」

美晴「……仲良いの？ あのひと」

大和「え、まあ、うん」

大和、美晴から目を逸らす。

美晴「私、大和くんと同じ大学に通えばよかった」

大和「いやうち医学部ないし」

美晴「一緒の大学通えばよかった」

大和「何言ってるの。美晴の夢のために頑張ってる勉強したんでしょ？」

美晴「え？」

大和「夜もなんかどっかで食べる？」

美晴「うん……」

○駅前

キョロキョロ辺りを見渡す美晴。

里奈、駆け寄ってくる。

里奈「美晴さん！」

美晴、ビクツとする。

里奈「お待たせしました」

美晴「い、いえ」

里奈「じゃ、行こっか」

美晴、コクリとうなずく。

○雑貨屋・店内

美晴、ビーズクッションをじっと見つめて
いる。

里奈「美晴さん？」

ビクツとする美晴。

里奈「いいのあった？」

美晴「ごめんなさい、時間かかっちゃって」

里奈「いいえー。私もいろいろ見れて楽しい！」

美晴「ありがとうございます、ございます」

里奈「いいえ！」

ニコツと笑う里奈。

○カフェ・店内

向かいって座っている美晴と里奈。

そわそわしている美晴。

里奈「あとどっか見たいところありますか？」

美晴「えっ、いや……」

里奈「服とかは？」

美晴「いえ、それはまた今度一人で行くので。

これ以上付き合わせるのは……」

里奈「そんなそんな！ 気にしないでください

い！ 私も楽しいし」

美晴「ごめんなさい……」

里奈「そういえば美晴さんって、大和くんと中

学から一緒なんですよね？」

美晴「はい」

里奈「大和くんって昔からあんなに社交的だった
んですか？ 私、大和くんのそういうところ

尊敬してて」

美晴「いや……そんなことなかったですよ」

里奈「へえ意外！　どんな感じだったんです

か？」

美晴「……教えたくないです」

里奈「え？」

美晴「私だけが知っていたいので」

里奈「あ、ごめんなさい……。気を悪くさせち

やったかな？」

美晴「——大和くんのこと好きなんですか？」

美晴、里奈をじっと見つめる。

里奈「……はい」

美晴「わ、私も好きです。ずっとずっと前から！」

里奈「……やっぱり！」

美晴「へ？」

里奈「そんな感じでしたんですね。二人、なん

か特別な空気感っていうか、そんなの感じた

し……。私たち、ライバルですね」

美晴、ゴクリと唾を飲み込む。

里奈、吹き出して、

里奈「なーんか久しぶりにこういう恋バナしたかも。中学生かって。照れるね」

美晴「(動揺して) えっと」

里奈「なんか嬉しいかも。ね、美晴ちゃんって呼んでいい？」

美晴「え、う、はい」

里奈「ライブルといえばライブルだけど、私、美晴ちゃんと仲良くなりたいな」

美晴「どうしてですか？」

里奈「こう、好きな人が一緒だからこそ話せることもあるし」

美晴「(理解できず) う、うーん？」

里奈「ほら、例えば好きになったきっかけと

か？ 私はー、(照れて) 花火かな」

美晴「花火？」

里奈「夏休みにね、サークルのみんなで花火大会行ったの。それでたまたま大和くんの隣で見てる。みんなで綺麗だねーとか言いながら見てて。……大和くん、『キラキラ消える時が一番綺麗だよ』って言ったんだ」

里奈、ジュースを飲む。

美晴「え？ それで？」

里奈「(慌てて) もちろん、それだけじゃない

よ？ 前々から話し合うし、優しいし、一緒

にいて楽しいなーって。でも、それが決定的

だったっていうか。私も、そのときちやうど

同じこと思ってた。消えるときキラキラして

て綺麗だなーって」

里奈、微笑んで、

里奈「それで、大和くんのが好きだなーっ

て気づいたの」

美晴「そう……」

里奈「美晴ちゃんは？ どうして、大和くんを

好きになったの？」

美晴「え……」

美晴、左手の平を見つめる。

美晴「……」

里奈「一目惚れとか？」

美晴「まあ、そんな感じですよ」

里奈「えー、素敵。それでずっと何年も好きで

居続けられるってすごいよね」

美晴「そう、かな……」

里奈「あー、やっぱりこういう話って照れるけ

ど楽しいね。私、美晴ちゃんと仲良くなれて

よかった」

美晴「……そう、ですか」

○駅前（夕）

里奈「じゃあまたねー」

美晴、気づちなく手を振る。

里奈、歩いて行く。

立ち尽くす美晴。

スマホの着信音。

美晴、スマホをトートバッグから取り出す。

スマホ画面には『大和くん』からの着信。

美晴、慌てて電話に出て、

美晴「もしもし！」

大和（電話）「あ、美晴ー？ 今バイト終わったんだけどさ」

美晴「大和くん！」

大和（電話）「里奈とまだいるの？」

美晴「え？」

大和（電話）「俺もそっち行っていい？」

美晴「……何それ」

大和（電話）「え？」

美晴「もう知らない！」

大和（電話）「え、な——」

美晴、電話を切る。

○バス停（夕）

大和、スマホを見つめて首を傾げる。

大和「えー？」

○大学・大講義室

美晴、大きくため息をつく。

スマホをチラッと見る。

通知は無い。

男子学生「ん、美晴に近づく。

男子学生「山口さーん。今日の夜暇？」

美晴「はい？」

男子学生「飲み会来ない？」

美晴「飲み会？」

男子学生「新入生の歓迎会も兼ねてやるみた

いで」

男子学生「先輩に女子呼んで来いって言われ

ててさあ！」

美晴「いや、私はそういうの苦手なんで……」

美晴の隣に座っていた女子学生、身を取

り出して、

女子学生「えっ、なにに飲み会？」

男子学生「そう」

女子学生「場所はー？」

男子学生「あ、駅前のさー」

男子学生「てか俺ら迎えに行くし」

女子学生「私先輩との繋がりがなかったんだよね

ー」

男子学生「ちょうどよかった」

美晴「いや、あの……」

○サークル棟・部室

大和、スマホを見つめている。

里奈、入ってくる。

里奈「あ、大和くんだ。お疲れー」

大和「お疲れ」

大和「この間ありがとうね」

里奈「いいえー。私も楽しかった！」

大和「美晴、こつちに知り合い全然いないから

さ。里奈が行ってくれて助かった」

里奈「私でいいならこれからも全然行くよ」

大和「そうしてくれると助かる。美晴もさ、内

気な感じだし、人見知りはちよつとするかも

しれないけど」

里奈「そうなの？ 私、すごく楽しかったよ。

もつと仲良くなりたいなって思った」

大和「ならよかった。この前は何か話した？」

里奈「うーん、内緒！」

大和「内緒？」

里奈「ガールズトーク」

大和「ガールズトーク？」

里奈「そうでーす」

大和「ふうん。そーですか」

笑い合う大和と里奈。

女子学生、入ってくる。

女子学生「お疲れ」

里奈「お疲れ」

大和「お疲れ」

女子学生「あ、里奈ー？ 今日的女子会中止だ
って」

里奈「あ、そうなの？」

女子学生「なんかさー、最近不審者が」

○居酒屋・大部屋（夜）

ガヤガヤ盛り上がっている学生たち。

隅の席でむすつとしている美晴。

中村祐人（こ）、グラスを持って美晴の隣
に座る。

ビクツとする美晴。

ニコツと笑う中村。

中村「新生だよね？」

美晴「は、はあ……」

中村「楽しんでる？」

中村、美晴との距離を詰める。

美晴「はい」

美晴、中村から離れ壁にぶつかる。

中村「(笑って)絶対嘘じゃん。どうせならさあ、

楽しもう？」

美晴「こういうの苦手なので」

中村「大学生には大事だよ？ 人との繋がりがりっ

ていうの？ ほら、先輩からレジュメもらえ

たりするからさー」

美晴、スマホをチラッと見る。

中村「あ、彼氏からの連絡待ってる感じ？」

美晴「別に彼氏じゃないけど」

中村「彼氏じゃないけどー？」

美晴、横目で中村を睨む。

中村「おー、こわ」

中村、ニコッと笑う。

× × ×

どんちゃん騒いでいる学生たち。

美晴、顔を真っ赤にしている。

美晴「でね？ よく分かんない女が出てきたわけですよ」

中村「うっわー、ひどい男」

美晴「ひどいでしょう？ でしょう？」

中村「美晴ちゃんかわいそー」

美晴「でね、その子がまたいい子なんですよおー」

中村「美晴ちゃん勝ち目ないじゃん」

美晴、中村を睨む。

中村「まー、中学からの付き合いな訳だし？
一緒にいた時間は美晴ちゃんの勝ちじゃん？」

美晴「それはそうですけどー」

中村「ていうかひどい男だねえ」

美晴「何ですか」

中村「だつてさー、美晴ちゃんが好きってこと知ってるんでしょ？
なのにさあ、ちよつと残酷すぎない？」

美晴「え？」

中村「え？」

美晴「……大和くん、私が好きって知ってるの

かな」

中村「え、知らないの？」

美晴「好きって伝えたことないかも」

中村「マジで？」

美晴「どうしよう……」

中村「いやでもさあ、ずっと一緒なんでしょ？」

それくらい分かるって」

美晴「分かってないかも。だから……。どうし

よう……」

美晴、泣き出す。

中村「あーあー」

中村、美晴の頭を撫でる。

中村「よしよし」

○居酒屋・入り口前（夜）

ごちゃごちやいる学生たち。

男子学生「金払ってない人ー？」

男子学生「幹事に渡してー」

美晴、グズグズ泣いている。

男子学生「え、泣いてる？」

中村、人をかき分け来る。

中村「あー、ごめんねー」

中村、美晴の肩を抱く。

中村「俺面倒見るから。二次会、行ってきてい

いよ」

男子学生「あ……はい」

中村、美晴の顔を覗き込む。

美晴「見ないでください」

中村「かわいそうに。俺に慰めさせて？」

美晴「結構です」

中村、美晴の肩を抱いたまま歩き始める。

美晴「な、何ですか」

中村「美晴ちゃんはさー、もっと広い世界知っ

た方がいいよ」

○ラブホテル・入り口（夜）

美晴、ギョツとして、

美晴「い、行かないですよ?!」

中村「休むだけ休むだけ」

美晴「はぁ？」

中村「まー、休んだりー、いろいろするだけ」

中村、美晴の肩を抱き中に入る。

○同・部屋（夜）

中村、美晴をベッドに押し倒す。

美晴「何するんですか！」

中村「言ってほしいの？」

美晴「同意のない性行為は犯罪です！」

中村「知ってます。嫌なら途中でやめますよー」

中村、美晴を抱きしめる。

美晴「ちよっ！」

中村「もし本当に嫌だったら俺のこと殺してい

いから」

美晴「はぁ？ そんなことするわけ——」

中村、美晴にキスする。

中村「うん？」

唾然とする美晴。

中村「え、キスもしてなかったの？」

美晴、こくりと頷く。

中村「あちゃー。ま、これノーカンで」

美晴「最低……」

中村「でもさー、あっちは今頃してるかもよ？」

美晴「(鼻で笑って)そんなわけない」

中村「男からとは限らないじゃん。女の子の方

からされたら、そりゃ断れないでしょー」

美晴「……」

美晴、涙がこみ上げてくる。

中村「泣いちゃった」

中村、美晴を抱きしめ首にキスする。

ぼーっと天井を見上げる美晴。

中村の唇が美晴の首に触れる。

中村、美晴の手を握る。

美晴、手に視線を向ける。

美晴「……あつたかい」

中村「(よく聞こえず) うん？」

中村、美晴の首にキスし続ける。

美晴、涙がこみ上げてくる。

○ 駅・改札前（朝）

寝癖がついた美晴、出てくる。

歩いてきた大和、気づいて、

大和「美晴？」

美晴、ビクツとする。

大和「何、今帰り？」

美晴「別に」

美晴、大和から顔を逸らす。

大和「飲んできたの？」

大和、ニヤニヤして、

大和「朝帰りかー」

美晴「うるっさいな！」

大和「（驚いて）な、何」

美晴「里奈さんのことだけ気にしてれば？」

大和「え？ 急にどうしたの」

美晴、大和を見つめる。

美晴「私、大和くんのこと好きだよ」

大和「へっ？」

美晴「知らなかったわけ？」

大和「いやだって」

美晴「ひどいよ！ 私の方がずっとずっと好き
だったもん！ それなのにさ……」

美晴、うつむく。

大和「美晴……」

美晴「里奈さんが好き？」

大和「……ごめん」

美晴「好きなの？」

大和「ごめん」

美晴、フツと笑って、

美晴「大和くん、あの人とセックスできるの？」

大和「は？ 何言ってるの。まだ酔ってる？」

美晴「大和くん、冷たいんだよ？ あの人に触

れたらそれバレちゃうんだよ？」

大和「……」

美晴「私だけが、大和くんのこと好きでいられ

る！」

大和「そんなことない……。そんなことない

よ！ きつと——」

美晴「じゃあ触れてみればいい！」

美晴、走り出す。

呆然と立ち尽くす大和。

○アパート・部屋（夜）

大和、パソコンに向かってている。

スマホをチラッと見る。

大きくため息をつく。

またパソコンに向かい直す。

スマホの着信音。

大和、慌ててスマホを見る。

里奈からの着信。

大和「（電話に出て）あ、里奈？ どうしたの？」

里奈（電話）「大和、くん？」

大和「うん？」

里奈（電話）「（か細く）あのね……」

大和「何？ よく聞こえないよ？ 里奈？」

里奈（電話）「（か細く）助けて……」

○住宅街（夜）

大和、走ってくる。

道路の脇でしゃがみ込んでいる里奈。

大和「里奈！」

里奈、顔を上げる。

里奈「大和くん……」

大和、里奈のそばにしゃがむ。

大和「大丈夫？」

里奈「うん……。ちょっと転んじやったけど」

大和「警察——」

里奈「お姉ちゃん来てから連絡しようと思って」

大和「お姉さん？」

里奈「うん、近くに住んでるから来てくれるっ

て」

大和「そっか……」

里奈「ぜ、全然大したことないんだけどね！ご

めんね、急に呼び出して」

里奈、ぎこちなく笑う。

里奈「ほんと、一瞬だったんだよ。向かいから

自転車でバーっと来てさ、それで一瞬……」

里奈、手で胸を抑える。

震えている手。

里奈「ほんの、ちよっとだけだったから、全然

平気！ 平気、だから……！」

大和「里奈……！」

里奈「——大和くん」

大和「うん？」

里奈、顔を上げる。

涙で頬が濡れている。

里奈「触って、くれない？」

大和「え……！」

里奈「ずっと、感触残ってるの……。大和くん
で上書きしてほしい」

大和「えっと……！」

里奈「お願い……！」

里奈、大和の手に触れようとする。

大和、咄嗟に里奈の手を避ける。

里奈「あ……！」

大和「ち、違くて！ あの、えっと」

里奈「そう、だよね。汚いよね」

大和「違うんだよ里奈」

里奈「ごめんね。もうお姉ちゃん来るし、行く
ね」

里奈、立ち上がる。

大和「里奈、違うんだ」

里奈「ごめん……」

里奈、駆けて行く。

大和、拳をギュッと握りしめる。

○大学・講義室

大和、チラッと横目で見る。

遠くの席に里奈が座っている。

里奈と目が合う。

里奈、大和から目を逸らす。

立ち上がり、足早に出て行く。

大和、慌てて立ち上がり追いかける。

○同・廊下

大和「里奈！」

里奈、立ち止まる。

大和に背中を向けたまま。

大和「その……」

里奈「もう大丈夫だよ。この間はごめんね」

大和、手を伸ばしかけるが途中でやめる。

里奈「……じゃあ」

里奈、駆けて行く。

○アパート・美晴の部屋（夜）

美晴、ドアを開ける。

うつむいて立っている大和。

美晴「大和くん？」

大和「俺には美晴しかないよ」

美晴「え」

大和、美晴の手を握る。

大和「美晴にしか、触れられない」

大和、美晴に抱きつく。

美晴「大和くん……」

美晴、大和を抱きしめる。

○同・リビング

扇風機が回っている。

テレビではニュースが流れている。

アナウンサーの声「新型コロナウイルスの影響」

で」

美晴「あ」

美晴(21)、パソコン画面をじっと見つめる。

美晴「先週提出だった……」

美晴、大きくため息をつく。

教科書を投げ捨てる。

ため息をつき頭を抱える。

美晴「えーっと、まず先生にメールして……」

美晴の手が不意に横で眠っていた大和

(21)に触れる。

ビーズクッションを枕に眠っている大

和。

美晴、大和を見つめる。

寝転がり大和に抱きつく。

美晴「……気持ちいい」

○大学・構内

マスクをつけている美晴、歩いている。

中村の声「美晴ちゃん？」

美晴、振り返ると、ウレタンマスクをつけた中村（22）立っている。

中村「久しぶりー。元気だった？」

美晴「……こんにちは」

中村「いやぁ大変な世の中になったね。飲みにも行けないし」

美晴「失礼します」

美晴、立ち去ろうとする。

中村「もう行っちゃうのー？」

中村、美晴に近寄る。

美晴「ソーシャルディスタンス」

美晴、中村から離れる。

中村「授業もオンラインなったりして遅れてる

よねー。分かんないとこ教えてあげるよ」

美晴「結構です」

中村「初めての相手としてね、心配してるわけですよ」

美晴、中村を睨む。

中村「そんな可愛い顔で見つめないの」

美晴「見つめてません」

中村「ていうか噂で聞いたんだけど男と住んでるってほんと？」

美晴「まあはい」

中村「前に言ってた好きな人？」

美晴「そうです」

中村「ふーん。どうせ自粛と称してやりまくってるんでしょ？」

美晴、歩き出す。

ついてくる中村。

中村「ていうかそろそろあれ、始まるでしょ。

解剖実習。美晴ちゃん大丈夫かなー」

美晴「私は大丈夫です」

○大学・解剖実習室

ガウンをまとう学生たち。

マスクをつけている。

男子学生「ちゃんと単位取れてる？」

男子学生「無理。コロナ留年するかも」

男子学生「(笑って)分かるわー」

美晴、黙々とガウンを着る。

× × ×

長谷川「黙禱」

目を瞑る一同。

長谷川克則(48)、学生たちを見る。

長谷川「えー、今回はねこんな不測の事態では

ありますが、協力していただいた故人の方、

ご遺族に敬意を払うことを忘れずに」

暗い表情の学生たち。

長谷川「リモートでもある程度みんな研修して

きたとは思うんで。まあ中にはなかなか学習

が進まなかった人もいるでしょうけどね」

顔を見合わせる男子学生たち。

長谷川「ま、始めていきましようか。とりあえ

ず、誰か来て」

長谷川、手招きする。

学生たちの目の前にはご遺体が横たわ

っている。

学生たち、目を逸らす。

長谷川「うん？」

美晴、手を挙げる。

長谷川「うん」

美晴、長谷川の隣につく。

長谷川「まずここを手で……」

男子学生「(ヒソヒソと) うわー、すご」

平然と手を伸ばす美晴。

遺体に触れビクツとする。

××××

(フラッシュ)

布団の中で抱きしめ合う美晴と大和。

××××

美晴、倒れる。

長谷川「山口さん?!」

男子学生「うわっ!」

○同・医務室

ベッドの上で目が覚める美晴。

美晴「あれ……」

ベッド脇の椅子に座っていた長谷川、気

づいて、

長谷川「あ、気がついた？」

美晴、起き上がる。

長谷川「倒れたんだよ、実習中に」

美晴「すみません……」

長谷川「まあ、よくあることだから。女子には
やっぱりきつかったか。あ、セクハラじゃないよ？」

いよ？」

美晴「すみませんでした。早く、慣れるように
します」

長谷川「(笑って)慣れちゃあダメでしょ」

美晴「(ぼそっと)でも、私は慣れてるはずなの
に……」

長谷川「次回も無理はしないように」

長谷川、立ち上がり出口に向かう。

美晴「……先生」

長谷川「はい？」

美晴「体温が極度に低い症状って、見たことあ
りますか？」

長谷川「低体温症？」

美晴「そういうのじゃなくて。見た目は普通な
のに、体温はない状態です。……死んでるみ

たいな」

長谷川「キョンシー？ あ、君たちの年代はキ

ョンシー知らないか？ 今風に言うとなん

び？」

美晴「そんなものいるんですか」

長谷川「医学的には不可能かなー。あはは。マ

ツドサイエンティストなら作り出すかもね」

ムツとする美晴。

長谷川「まあ体温のない人間なんていないとい

うわけだよ」

美晴「絶対に？」

長谷川「絶対ということは世の中無いけどねえ。

まあ、僕の今までの経験と知識から言うと」

長谷川、微笑んで、

長谷川「そんな人間は生きていない」

○マンション・寝室（夜）

ベッドに寝転がってスマホをいじる大

和。

大和の上に乗っかっている美晴。

大和の胸に耳を当てる。

心音が聞こえる。

大和「(笑って) 何さっきから」

美晴「ううん」

大和「明日さ、一回家戻るね」

美晴「えっ、なんで？」

大和「荷物。不在連絡溜まってるんだ」

美晴「宅配？」

大和「母さんから」

美晴「ああ……」

大和「受け取って家に入れておくよ」

美晴「私も行く」

大和「ううん。美晴は大学あるでしょ」

美晴「でも」

大和「美晴は夢のために頑張ってるんだから」

大和、美晴の頭を撫でる。

美晴「……気を付けて行ってきてね」

○アパート・玄関

大和、鍵を回すが感覚がおかしい。

恐る恐るドアノブに手をかけると回る。

慌ててドアを開ける。

床には不在連絡票と『いのちのいずみ』

ラベルのペットボトルが散乱している。

大和「……母さん」

マスクの上にフェイスガードをつけた

遠藤温子（あつ）、立っている。

手にはヤカン。

大和「来るなら連絡してよ」

温子「お水送ってるのに受け取られてないから」

大和「……再配達頼むの忘れてたんだよ」

温子「家に帰ってきなさい」

大和「は？ 何急に」

温子「大学も今オンラインとかになってるんで

しょう？」

大和「そうだけど」

温子「じゃあここにいる必要もないじゃない。

うちの中に入れていいのよ。世の中がどうな

ってるか分かってるの？」

大和「コロナでしょ。だから母さんもわざわざ

こっちに出てこないで」

温子「(遮って) 帰って来るべきなの！」

大和「何でそんなこと母さんに言われなきゃな

んないんだよ！」

温子「あなたのことを思っ言ってるの。今

までどんな思いしてきたか、考えてみなさい」

温子、大和の顔を覗き込む。

温子「あなたは、あなたは誰とも関わらず、閉

じこもってることが幸せなの」

大和「……俺の居場所はここにしかないよ」

大和、温子を睨みつける。

大和「俺今日バイトだからもう行くわ。水ちや

んと沸かして飲みますから」

大和、出て行く。

温子、追いかけて、

温子「もうあなたが生きていける世界じゃない

のー！」

温子を無視して歩いていく大和。

○大学・コンビニ

美晴、入ってくる。

入口にサーモグラフィカメラが設置
されている。

ふと見ると、モニターにはオレンジ色に
映っている美晴の影。

次々と映る人々もオレンジや赤色の影
で映る。

美晴「……」

○街中

マスクをつけた人々が行き交う。

男の声「三十七度五分だったらさー」

女の声「私全然平熱だったよー」

荒い息遣いで早歩きする大和。

スマホの着信音。

ビクツとする大和。

大和「(電話に出て) はい」

店長(電話)「あ、大和ー? 今日シフト入って
るよな?」

大和「はい」

店長(電話)「悪いんだけどさ来るときウエット
ティッシュ買ってきてくんない？ 箱に入
ってるやつ」

大和「ああ、はい」

店長(電話)「これから出勤する前には検温やっ
てもらおうと思って」

大和「え……」

店長(電話)「まあ体温計使って拭く用にさ。本
当は家で測って来てもらいたいんだけどス

ギとか絶対忘れるじゃん？」

手が震える大和。

店長(電話)「だから一応予備で」

大和「俺……、すみません……」

店長(電話)「うん？」

大和「すみません辞めます！」

店長(電話)「え？ ちょ」

大和、電話を切る。

女の声「検温にご協力くださいーい」

店の入り口で非接触型体温計をおでこ
に向ける店員の姿。

『検温実施中』の登り旗とともにサーモ
グラフィーのモニターが設置されてい
る。

息が上がる大和。

非接触型体温計の先端が眉間に突き立
てられているように錯覚する。

ピツという体温計の音が響く。

呼吸がうまくできない大和。

○同・キッチン

野菜を切っている美晴。

ガチャッと鍵の開く音が聞こえる。

大和、バタバタと入ってくる。

美晴「おかえりー」

大和「美晴、美晴！」

美晴「なあに？」

大和「俺体温あったよ！」

美晴「え？」

大和「測ったら三十六度五分！ ほら！」

大和、体温計を見せる。

三十六度五分の表示。

美晴「えっ！　すごい！」

美晴、目に涙を浮かべ、

美晴「よかったねえ、大和くん」

大和「これでやっと」

大和、美晴を見つめて、

大和「君から離れられる」

○同・リビング

息苦しくて目が覚める美晴。

起き上がり周囲を見渡す。

大和はいない。

ガチャッと鍵の開く音が聞こえる。

ハッとドアの方を見る。

大和、入ってくる。

大和「美晴……」

美晴「大和くん……？」

大和、美晴に駆け寄り抱きつく。

美晴、大和に触れる。

ホッとする美晴。

震えている大和。

美晴、我に帰って、

美晴「どうしたの？」

大和「怖い……」

美晴「え？」

大和「バレるのが怖い……。他の人に、俺が冷

たいってバレるのが、やっぱり死ぬほど怖い」

大和、美晴に強く抱きつく。

大和「怖いよ……」

美晴「大和くん……。ずっとお家にいよう？

怖い外なんて行くことないよ」

泣きじゃくる大和。

美晴「ここは安全だからね」

美晴、大和を強く抱きしめる。

美晴「私が大和くんを守るからね」

○同・寝室（夜）

美晴の隣で眠る大和。

美晴、大和を見つめている。

大和「うう……」

美晴、慌てて大和の手を握る。

大和「やめて！」

起き上がる大和。

息が上がっている。

美晴「大丈夫だよ大和くん」

美晴、大和を抱きしめる。

美晴「大丈夫だから」

○大学・解剖実習室

あくびをする美晴。

長谷川、気づいて、

長谷川「山口さん」

美晴「は、はい」

長谷川「出て行きなさい」

美晴「へ？」

長谷川「マスクしてても分かるからね。集中で

きかないならご献体に失礼。出て行って」

美晴をチラッと見る学生たち。

美晴「……はい」

美晴、出口に向かう。

○同・解剖実習室前

ため息をつく美晴。

○アパート・リビング

髪はボサボサでひげが伸びている大和。

テレビではコロナ関連のニュースが流

れている。

テレビの電源を切る大和。

○大学・解剖実習室

学生たち、出て行く。

美晴、入ってくる。

美晴「先生」

長谷川、器具を片付けている。

長谷川「うん」

美晴「すみませんでした」

長谷川「なんだか顔色悪いよ。寝不足？」

美晴「最近、眠れなくて」

長谷川「そんなんでちゃんと勉強はできてるの？」

美晴「……」

長谷川「山口さんはどうして医者を目指したの？」

美晴「……助けたい人がいて」

長谷川「(鼻で笑って)患者は一人じゃないけどね。まあいいんじゃないそういうきっかけ」

美晴「……本当に今日はすみませんでした」

長谷川「ま、こんな時期だから体調にはお気を付けて」

ニカッと笑う長谷川。

長谷川「手洗いうがいするんだよー」

○同・中庭

中村「みーはるちゃん」

美晴「……こんにちは」

中村「実習追い出されたんだって？」

美晴「何で知ってるんですか」

中村「お兄さんは何でも知ってます」

美晴「失礼します」

中村「ちゃんと眠れてる？ 毎晩張り切りすぎ
てんの？」

美晴「失礼です」

中村「美晴ちゃんずっとその男のこと好きだっ
て言ってるけどそれって本当に恋なのかな」

美晴「はい？」

中村「ただ依存してるだけじゃない？ お
互いに」

美晴「分かったようなこと言わないでください。
そんなんじゃないやありません」

中村「まあね、恋愛なんて承認欲求の満たし合
いだからね。なかなか自分の価値を認めてく
れる人間なんていないし。だからこそそうい
う人が特別になるんだし」

美晴「語らないでください。私忙しいんで」

中村「(笑って) 辛辣ー。まあまあ」

中村、美晴を抱きしめる。

美晴「ちょ！」

中村「俺でも誰でも美晴ちゃんを満たせるし、

美晴ちゃんも都合よく使われるだけの女に

ならないでね」

美晴「……暑いです」

美晴、中村から離れる。

中村「ごめんごめん」

美晴「まじソーシャルディスタンス守ってくだ

さっ」

中村「はいはい。美晴ちゃんも好きと依存を混

同しないでください」

ムツとする美晴。

美晴「……先輩は何で医者を目指したんですか」

中村「モテたいから」

美晴、ため息をつく。

中村「そんなもんでしょ」

美晴「そうですか」

中村「美晴ちゃんはどうして？　なんかご立派

な理由でもあるんですか？」

○住宅街

美晴「大和くんを助けるんだ……」

息を切らしている美晴。

美晴「だって好きだもん……好きだもん。ずっと、ずっと、あの日から……！」

美晴、立ち止まる。

美晴「だって、あの時……」

左手の平を見つめる。

美晴「……あれ？」

美晴、右手の平を見つめる。

両手の平をじっと見つめる。

美晴「……」

○マンション・寝室

横並びで寝ている美晴と大和。

美晴、大和の寝顔を見つめる。

セミの鳴き声が聞こえる。

大和、目を開ける。

大和「何、寝てなかったの？」

美晴「うん」

大和「セミ、鳴いてるね」

美晴「大和くん」

大和「目を閉じてれば寝れるよ」

大和、目を閉じる。

美晴「私のこと……」

大和「（目を閉じたまま）うん？」

美晴「……ううん、おやすみ」

大和「おやすみ」

美晴、目を閉じる。

大和にすり寄る。

美晴「冷たくて気持ちいい……」

○一軒家・縁側

セミが鳴いている。

棺桶の中に横たわる美晴の姿。

○マンション・寝室（夜中）

ハッと目覚める美晴。

ぎゅっと大和の手を握っている。

大和「（寝ぼけながら）美晴？ 痛いよ」

美晴「大和くん……」

× × ×

ベッドに横になっている美晴。

大和「大丈夫？ 美晴」

大和、水を持ってくる。

体温計が鳴る。

美晴「三十七度四分―……」

大和「熱出ちゃったね」

美晴「コロナだったらどうしよう……。大和くん
んにうつっちゃう……。大和くん自分の家戻
って……」

大和「今更じゃない？ ていうか大丈夫だよ。

美晴最近顔色悪かったし、疲れが出たんじゃ

ないかな」

大和、美晴のおでこに手を当てる。

大和「……熱いね」

美晴「気持ちいい……」

美晴、大和の手に擦り寄る。

美晴「頭ガンガンするー……」

大和「お水もつと飲む？」

美晴「うん、飲みたい」

大和「こういうときだけ実家に感謝だな」

○同・キッチン（夜中）

冷蔵庫の中には『いのちのいずみ』ラベルのペットボトルが大量にある。

大和、手に取る。

大和「（ペットボトルを握りしめ）……」

○同・寝室（夜中）

大和、入ってくる。

美晴「ありがとう、大和くん」

大和「こういうときってどうしたらいいんだろ

う。俺熱出したことないからさ」

美晴「そうなの？」

大和「うん」

美晴「あ……」

大和「少し羨ましいよ」

美晴「……」

大和「何が効くの未来のお医者さん」

大和、美晴の横に座る。

大和「美晴はすごいよね。自分の将来のこと考

えてさ」

美晴「そんなことないよ」

大和「医者になるって」

美晴「えだってそれは」

大和「俺さあ」

口をつぐむ大和。

美晴「うん？」

大和「ううん」

美晴「どうしたの？」

大和、美晴のおでこにペットボトルを当ててる。

大和「俺に体温があつたら、この水冷やして飲んでたのかな」

美晴「……どうしてそんなもしもの話するの？」

大和「どうしてって、何も意味ないよ。ちょっと思っただけ」

美晴「……そのもしものに、私はいる？」

大和「え？」

美晴「大和くんが温かくなったら、私はそこにいる？」

大和「何言ってるの。それは」

美晴、大和を見つめる。

大和「美晴、もう寝た方がいいよ。明日病院行

こう」

美晴「……うん、そうだね」

横になる美晴。

美晴「おやすみ」

大和「おやすみ」

× × ×

朝日が出てきた。

目が覚める美晴。

ふと隣を見ると大和が美晴の手を握り

しめて眠っている。

大和「ふふ」

美晴「(微笑んで) 何の夢見てるの？」

美晴、大和に寄り添う。

大和「あったかい……」

美晴「……」

美晴、自分のおでこに手を当てる。

大和の手から離れる。

○大学・教授室

美晴「ご心配おかけしました」

長谷川「よかったね。何事もなくて」

美晴「PCRも陰性だったし、病院では疲れが出

たんじゃないかって」

長谷川「うんうん。まあこれからも体調に気を

つけて勉強に励んでください」

美晴「……」

長谷川「何か悩んでるようですね。聞いて欲し

い？」

美晴「……私、ある人を助けたくて医者を目指

したんです」

長谷川「はいはい」

美晴「今は勉強よりも、その人のそばにいた方

がいいんじゃないかって」

長谷川「ふうん」

美晴「実習で家を開けることが多いし、でもこ

うしてる間にも不安にさせてるんじゃない

かって。そばにいてあげなきゃ」

長谷川「医者になるより優先事項なの？ それ」

美晴「最終的には医者になって救いたいけど、今はそばにいるべきというか。その人を守るためには必要っていうか、えっと、あれ：

…？」

長谷川、美晴の顔を見る。

長谷川「君の場合は現実から目を逸らしているだけに思える」

美晴「違います」

長谷川「いやいいんだよ？ 夢を見ても。ただ、その夢の居心地が良ければ良いほど、目覚めは最悪だよ」

美晴「……」

長谷川「でも君はいつか目覚めなければならぬ。医者になるということはそういうことだ。誰かを救いたいと言葉にすることは」

長谷川、ニカッと笑って、

長谷川「まあよくあることですよ。二年次の進路変更。まず振り返ってみるのがいいんじゃないかな。一番最初から」

美晴「一番最初……」

長谷川「初めから」

美晴「……はい」

○（回想） 中学校・保健室

ソファに座っている大和（13）。

体温計を持っている美晴（13）。

美晴「だって熱あるかもよ？ ほら」

美晴、大和に近づく。

○（戻って） 住宅街（夕）

歩いている美晴。

トートバッグからストールを取り出し

羽織る。

○マンション・リビング（夕）

美晴、入ってくる。

大和「おかえりー」

美晴「……ただいま」

大和「ご飯何にしよっか」

美晴「大和くん」

美晴、大和に抱きつく。

大和「何、どうしたの？」

大和、美晴の頭を撫でる。

美晴「大和くんに触れてるとね、私気持ちいいんだ」

大和「(にやけて) んふふ」

美晴「ひんやりしてて、眠れない時も大和くんを抱きしめるとよく眠れるの」

大和「そっかそっか」

美晴「でも、その気持ちよさに溺れてちやダメ

なんだよね……。現実から目を逸らしたまま

じゃダメなんだよね」

大和「うん？」

美晴「——大和くん」

大和「何？」

美晴「私」

大和「うん」

美晴「大和くんから離れるね」

大和「え……？」

美晴「いつまでも、このままじゃダメだ。この家から出て行く。大和くんとはもう一緒にいられない」

大和「え、ちょっと待ってよ」

美晴「私たち、別々に生きよう」

大和「どうして？ 俺何かした？」

美晴、首を横に振る。

大和「じゃあどうして」

美晴「思い出せないの」

大和「え？」

美晴「あの日、触れたのは」

美晴、両手の平を見る。

美晴「右手だっけ、左手だっけ」

美晴、両手の平を見つめる。

美晴「初めて、大和くんに触れた手は、右だっけ左だっけ」

大和「え、覚えてないよ」

美晴「うん、私も思い出せない」

大和「それで？ それが思い出せないから？」

美晴「うん」

大和「そんなこと、どうでもいいよ」

美晴「どうしてもよくない！」

大和、ビクツとする。

美晴「だって、大事なことなの。なのに、そん

な……そんな大事なことも思い出せなくな

ったの」

美晴、うつむく。

美晴「大和さんの冷たさしか、覚えてないの」

大和「……」

美晴、玄関に向かおうとする。

大和「行かないで！」

大和、美晴の腕を掴む。

美晴「大和くん」

美晴、大和を見つめて、

美晴「もう分かんないの。全部ごちゃごちゃに

なっちゃったの。大和さんに体温をあげたく

て医者になろうって決めたのに、大和くんが

あつたかくなったら私なんかいらんじ

やないかって思ったり、私があつたためてあげ

なきやいけないのにそばにいたらどうした

「いいのか分からないままでし」

大和「いいじゃんずっとこのままで……。一緒
にしようよ」

美晴、大和の頬に触れる。

涙で頬が濡れている大和。

美晴「大和くん、聞いてもいい？」

美晴、深呼吸して、

美晴「私のこと好き？」

大和「え……？」

美晴「……うん」

美晴、大和からゆっくりと手を放す。

大和「——好き！ 好きだよ！」

美晴「私以外に大和くんに触れる人がいても？」

大和「そんなのいないよ」

美晴「いたら？ どうするの？」

大和「そんなもしもの話……」

美晴「もしもの話をしてるの」

大和「……」

うつむく大和。

美晴「私、最初から間違ってたみたい。大和く

んと会った時からずっと」

大和「美晴？」

美晴「でも、大和くんと出会えてよかったよ」

美晴、大和の手を放し玄関に向かう。

大和、力なくしやがみ込む。

大和「嫌だ……嫌だよ」

大和、美晴の背中に向かって、

大和「離れないでよ！ 一人じゃ無理だよ！」

美晴、立ち止まる。

大和「俺は一人じゃ生きていけないよ……。美

晴がいなきゃ生きていけない」

美晴、振り返らない。

美晴「生きていけるよ。大和くんは、生きてる

んだから」

美晴、出て行く。

○病院・病室

少し大人になった美晴、入ってくる。

白衣姿である。

窓が開いており、風でカーテンが広がる。

カーテンに人影が映る。

美晴、その人物に抱きつく。

だが、抱きついている相手は誰なのか分
からない。

美晴「温かい……」

【終】